

日本の**詩歌**

22

三好達

中央公論社

日本の詩歌 22

©1967

三好達治

昭和42年12月5日初版印刷
昭和42年12月15日初版発行

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 東京プロセス株式会社
色刷口絵写真印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

測量船

7

測量船拾遺

73

南窗集

87

閒花集

100

山果集

116

蘿

131

艸千里

144

艸千里拾遺

171

一點鐘

179

羈旅十歳

朝菜集

寒
柝

花
筐

春の旅人

故郷の花

砂の砦

日光月光集

駱駝の瘤にまたがつて

百たびののち

356

306

296

276

254

250

228

225

219

213

詩人の肖像

鑑賞

年譜

石川 淳

阪本 越郎

三
好
達
治

測量船

春の岬

春の岬旅のをはりの鷗かもめどり
浮きつつ遠くなりけるかも

乳母車

母よ――

淡くかなしきもののふるなり
紫陽花あぢさゐいろのもののふるなり

『測量船』は「好洋治の詩人としての地位を確立した処女詩集（昭和五年刊）である。作者はすでに三十歳、新詩精神を主張する季刊詩誌『詩と詩論』の代表的な新進詩人であった。「新しい詩歌の可能性を、貧しい私の才分なりに、力をつくして摸索しつづけた」と後年作者が語ったように、この詩集には、様々な詩歌形式が意識的に取り上げられていて、独日の意匠をこらした彫琢ていさくの作品が多く、収めるところ三十八篇のことごとくが、「端数はなごのない完璧の世界である」（丸山薫「詩に就て――『測量船』の世に出るに際して」といわれている。

「春の岬」は短歌形式をもって全巻の哀調を象徴したもので、作者が二十七歳の春、伊豆湯ヶ島に療養中の梶井基次郎を見舞ったあと、

はてしなき並樹のかげを
そうそうと風のふくなり

時はたそがれ

母よ 私の乳母車を押せ
泣きぬれる夕陽にむかつて
隣々と私の乳母車を押せ

赤い総ある天鵞絨の帽子を
つめたき額にかむらせよ

旅いそぐ鳥の列にも

季節は空を渡るなり

淡くかなしきもののふる

紫陽花いろのもののふる道

母よ 私は知つてゐる

下田から沼津へ出た船旅の抒情だ
という。

「乳母車」は、作者が東大仏文科
に在学中の大正十五年六月、同人
雑誌『青空』に発表、百田宗治の
絶讃を得た、いわば詩壇へのデビ
ュー作である。

乳母車を押せと母にせがむ幼児
の情景は、詩人の心に浮んでくる
はかなく、とらえるすべもない、
追憶の情緒そのものを形象化した
ものである。作者も「幻覚めいた
情景」は「言葉を言葉のまま、感
覚の対象として受けとつてもらいた
い」といつている。

「淡くかなしきもの」「紫陽花い
ろのもの」は秋の夕方の薄明るい
空気の色合であろう。a音の頭韻
が効いている。

「遠く遠くはてしない道」は永遠
の郷愁、母への慕情のはてしなさ
をいうのであろう。

この道は遠く遠くはてしない道

雪

太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。
次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。

甃のうへ

あはれ花びらながれ
をみなごに花びらながれ
をみなごしめやかに語らひあゆみ
うららかの甃^{あしおと}音空^{ひとみ}にながれ
をりふしに瞳^{ひとみ}をあけて

「雪」は、単純をめざす達磨の俳諧的詩法の極点を示す作品である。意味を深くするため、意識的に語を節約した短詩形式である。

この単純で簡素な二行の詩句の中に含まれている民話風のノスタルジアは無類である。太郎、次郎はごくありふれた日本の子供の代名詞として使われている。太郎も次郎も同じ家の子と解してもよいが、別々の屋根の下に眠る子供を考え、白い雪に覆われた民家の群落を想像した方が鑑賞は深まると思う。同じことばの繰返し、その韻律によってしんと降り積もる雪の無限感を表わしている。愛誦詩の多い達磨の抒情詩の中でも最も親しまれている詩である。

「甃のうへ」の風景は、どこか郊外の大きな古い寺院であらうか。「もともと架空寺、どこかの場所に実在するどんな寺院をも、それは

翳^{かげ}りなきみ寺の春をすぎゆくなり

み寺の薨^{いらか}みどりにうるほひ

廂^{ひさし}々に

風鐸^{ふうたく}のすがたしづかなれば

ひとりなる

わが身の影をあゆまする甃^{いし}のうへ

少年

夕ぐれ

とある精舎^{しやうじや}の門から

美しい少年が帰つてくる

暮れやすい一日^{いちにち}に

てまりをなげ

指していない」と作者はいうけれど、鑑賞者の想像は自由であらう。「翳りなきみ寺の春をすぎゆくなり」までが一段落で、「あはれ花びらながれ／をみなごに花びらながれ」と「うららかの登音空にながれ」とは脚韻めいた繰返しで、流動感にあふれ、空間を横さまに流れる桜の花びらの美しさとひらめきが感じられる。

この詩の要は「ひとりなる／わが身の影をあゆまする甃のうへ」にある。一步一步孤独を感じながら歩いていく、青年期の堪えがたい春愁が、余韻深く洩らされている。

詩全体に、外景がうららかであればあるほど詩人の内面の悲哀は濃いついて、近代リリシズムの典型的な作品の一つである。

「少年」は、「甃のうへ」の青春賦よりはもう少し若い、無邪気な

空高くてまりをなげ

なほも遊びながら帰つてくる

閑静な街の

人も樹も色をしづめて

空は夢のやうに流れてゐる

渚

夕暮が四方に罩め、青い世界地図のやうな雲が地平に垂れてゐた。草の葉ばかりに風の吹いてゐる平野の中で、彼は高い声で母を呼んでゐた。

街ではよく彼の顔が母に肖てゐるといつて人々がわらつた。釣針のやうに脊なかをまげて、母はどちらの方角へ、点々と、その

少年の歩みをとらえている。

とある精舎（寺）の門から家路をたどる少年が「美しい少年」であることが、詩全体に響いていることを見逃してはなるまい。背景はひっそりとした夕方の街筋で、樹木の多いそのあたりの柔らかな空気の匂いも感じられる。

「渚」は遠逝の母への思慕を述べた散文型の抒情詩である。母と子の顔や声の相似が記されているが、真実「を」を「嘘」のように書いたところに、詩人の孤独な悲しさがあった。

詩は真実を嘘のように書くものだとは、彼の敬慕する萩原朔太郎の教えであった。

足跡をつづけていつたのか。夕暮に浮ぶ白い道のうへを、その遠くへ彼は高い声で母を呼んでゐた。

しづかに彼の耳に聞えてきたのは、それは餌こだまになつた彼の叫声であつたのか、または遠くで、母がその母を呼んでゐる叫声であつたのか。

夕暮が四方に罩め、青い雲が地平に垂れてゐた。

湖 水

この湖水で人が死んだのだ

それであんなにたくさん舟が出てゐるのだ

葦あしと藻草もぐさの どこに死骸はかくれてしまつたのか

「湖水」は水死者を蔵する湖の無気味な沈黙が主題で、もの寂しい湖辺の風景が浮んでくる。作者が学生時代に訪れた北陸の片山津の風景を描いたものだ（『畠中哲夫日記』昭和三十九年『秋』七、八月号）という。

それを見出した合図あひづの笛はまだ鳴らない

風が吹いて 水を切る鱗ろの音かじの音
風が吹いて 草の根や蟹かにの匂かじひがする

ああ誰かがそれを知つてゐるのか
この湖水で夜明けに人が死んだのだと

誰かがほんとに知つてゐるのか
もうこんなに夜が来てしまつたのに

村

鹿は角に麻縄あさなはをしぼられて、暗い物置小屋にいれられてゐた。何も見えないところで、その青い眼はすみ、きちんと風雅に坐つて

「この湖水で夜明けに人が死んだのだ」「誰かがそれを知つてゐるのか」という反語的表現によって、より強く湖中に溺死体を暗示し、いよいよ湖水の冷たい無気味さを表わすことに成功している。

上掲の「一村」と後の「一村」（五ページ）と、二つの「一村」という詩を見ると、いずれも鹿というおとなしい動物が捕えられて、暗い物置小屋に入れられたり、犬に噛み殺されたりしている。その哀れさが春愁を誘う。

河上徹太郎によると、「鹿のイメージはその後堀井との友情のそれにオーバーラップされ、そのころの三好のミューズの役目を果たしていたようだ」（『達治詩日記』『文学三昧』）という。

作者は「自作について」の中で、この作品を「単純なことは並べただけ」というが、そのことばの

ゐた。芋が一つころがつてゐた。

そとでは桜の花が散り、山の方から、ひとすぢそれを自転車がいっていった。

背中を見せて、少女は藪を眺めてゐた。羽織の肩に、黒いリボンをとめて。

春

鶯鳥。——たくさんいつしよにゐるので、自分を見失はないために啼いてゐます。

蜥蜴。——どの石の上のぼつてみても、まだ私の腹は冷めたい。

選択に俳諧的な趣向がほとんどこされている。たとえば「背中を見せて、少女は藪を眺めてゐた。羽織の肩に、黒いリボンをとめて」は、語が特別に配置されているために、ゆるやかに読まれる。そこから村落の物音のない春の夕方、外に立っている少女の春愁の状態がくつきりと描き出されている。

「春」のユーモアは、生きものの生態を通して、人間生活の孤独感を象徴しているところにある。啼きたてる鶯鳥も、冬眠から覚めた蜥蜴も、満されない気持でいる。いずれも春の暖気の中で、宿命的なおのれの孤独を嘆いている。

大正の末ごろ、岸田国士によるジュール・ルナールの名訳『葡萄畑の葡萄作り』が出て、動物や昆虫に関する機知に富んだ詩的短章が当時の詩人たちを夢中にさせた。この詩にもその影響が顕著にみら